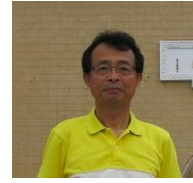


「100年企業」を目指した台湾旅行

高知県 建設/総合技術監理部門

右城 猛

(株) 第一コンサルタンツ



なぜ台湾か

昨年11月、「台湾を愛した日本人土木技師八田與一の生涯」の著者である古川勝三先生から、八田與一(はったよいち)の話を伺う機会があった。古川先生とは初対面であったが、時間の経つのを忘れて熱く語られる先生の話に感動し、思わず「先生、私たちを台湾に連れて行って下さい。與一像の前でこの話をして下さい」とお願いした。

今年、第一コンサルタンツは創立50周年を迎える。その記念に社員と一緒に旅行をしたいという思いと、インフラ整備の仕事に社員一人ひとりが誇りを持ってもらいたいという思いを持っていた。先生と台湾に行くことでこの2つが叶えられると思えたのである。

社員旅行は、平成16年のハワイ旅行以来である。社員の希望を優先させるべきとも考えたが、単なる慰安旅行にはしたくなかった。

「100年企業」を目指すためのヒントを探る旅にしたかった。

嘉南平野と烏山頭ダム

高速鉄道(新幹線)で嘉南平野に入ると、稲が青々と育った水田地帯が広がってきた。二期作目の蓬莱米に違いない。日本統治時代に磯永吉博士が品種改良して作ったものである。食事の時に欠かすことなく飲んだあの美味しい台湾ビールにも蓬莱米が使われている。

蓬莱米が育つのは、八田與一が造った烏山頭(うさんとう)ダムをはじめとする嘉南大圳(かなんたいしゅう)が嘉南平野を潤しているためである。嘉南平野は、嘉義県と台南市にまたがる広大な平野で、その面積は香川県



に匹敵する。作物が育たない不毛地帯を穀倉地帯に変えたのである。

烏山頭ダムは、高速鉄道の嘉義駅からバスで約1時間の距離にあった。珊瑚潭(さんごたん)とも呼ばれるダム湖は、複雑に入り組んだ形をした島々が水面に顔を出し珊瑚樹のように見える。

セミ・ハイドロリックフィル工法で築造されたこのダムは、自然堤が土砂で形成されるのと同じように造られている。天然湖のように、周りの自然とよく調和していた。

気温が30度を超える炎天下を古川先生の説明を聞きながら、長さ1.3kmの堤防を歩くと、相思樹が植えられた小高い丘にたどり着いた。そこに技師八田與一の銅像があった。作業服姿で地面に腰を下ろし、右手を頭にやりながら工事の進み具合を見守っている。與一のいつものポーズである。人差し指で髪の毛をぐるぐる回す癖があったというから、四六時中物思いにふけていたのであろう。

後方には、八田夫妻の遺骨を納めた日本式の墓が建てられていた。毎年、與一の命日の5月8日にはここで慰霊祭が執り行われている。

八田與一と日本精神

当時、烏山頭ダムのように高さ 56m を超える規模のダムは、日本にはなかった。しかもこの規模のダムをセミ・ハイドロリックフィル工法で施工するのは世界初であった。

今日の金額で 5 千億円とも言われるこの工事の設計から施工まで一切を、若干 32 歳の青年技師に任せた当時の関係者の決断には敬服させられるが、またそれを引き受けた與一の度胸にも驚嘆させられる。

「大きな仕事は、30 代か 40 代までに行わなくては駄目だ。年老いてからは、からだはともかく気力が続かぬ」が與一の持論であった。この工事を完成させるまでには、自ら解決しなければならない課題が次々と襲ってきたことは想像に難くない。與一の毎日の睡眠時間は 4、5 時間であったようである。30 代、40 代にどのような仕事に恵まれ、どのように取り組み、そしてどのような成果を出すかで技術者としての価値が決まるように思う。

與一は、この工事を完成させるのに 10 年の歳月を要した。その間に 2 つの大きな試練と遭遇している。1 つはトンネル掘削工事中の爆発事故で、50 数名の犠牲者を出す。これによって工事が大幅に遅れ、予想をはるかに超える予算超過になる。2 つ目は、日本に壊滅的打撃を与えた関東大震災。復興に莫大な資金が必要になることから嘉南大圳への補助金が大幅に削減され、約半数の職員を解雇せざるを得ない状況になるのである。

そうした危機的状況下でも、「八田所長を信じて付いて行きさえすれば、私たちのようなものでも決して見捨てたりはしない」と部下の一人ひとりから厚い信頼を得ており、その信頼から生まれた絆が困難を克服して行ったものと思われる。

台湾人がよく使う言葉に「日本精神」がある。「嘘をつかない」「不正なお金は受け取らない」「失敗しても他人のせいにはしない」「与えられた仕事に最善を尽くす」の 4 つを意味



している。今の日本では死語になっている「日本精神」を與一は誰よりも大切にしていたのだろう。

台湾旅行を振り返って

台湾出発の 1 ヶ月前、中国福建省で鳥インフルエンザ感染者が出た。感染は 132 名に広がり、37 名の死者も出た。台湾にも 1 人の感染者があったが、外務省の渡航情報に危険情報が出されていなかったため旅行を決行した。

10 年前の創立 40 周年の時、サーズが世界中で大問題になり、予定していた海外旅行を取りやめたことがある。その時のいやな記憶が蘇った。

今回の旅行を振り返ると、若干のトラブルはあったものの、大事に至ることなく記念に残る楽しい旅となった。第 1 班、第 2 班に同行していただき貴重な話をたくさん、そして熱く語ってくださった古川勝三先生、私の夢に付き合い、現地では集合時間を守り品位と思いやりのある言動をとっていただいた社員の皆様に心より感謝申し上げる。